

ヘーゲル「世界史の哲学」講義（1822/1823年） インド論の資料源泉をめぐるノート*

神山伸弘

はじめに

ヘーゲルは、1822/1823年冬学期にベルリン大学ではじめて「世界史の哲学」の講義を展開したさい、その世界史段階を地域に代表させるコンセプトを採用した⁽¹⁾。このコンセプトは、これに先立つ『法の哲学要綱』（1820年）の「人倫態」章「国家」節「世界史」項ですでに公表しているもので、「世界精神」が「自然の直接態」から解放される時間的進行を、「自己意識の形態がもつ原理」の違いとして捉え、その原理を空間的に「世界史上の国(welthistorisches Reich)」に割り当てることで成り立っている⁽²⁾。この割り当ては、ヘーゲルが1817/1818年冬学期にハイデルベルク大学で「自然法と国家学」講義をしたさい、基本的なところで既に確立していた⁽³⁾。ちなみに、その「世界史上の国」は、周知のように、オリエント、ギリシア、ローマ、ゲルマンの4つだとされ、この順に世界史が進行するとされる。

ヘーゲルが「世界史の哲学」を時間と空間の交差として表現するための要となるものは、「自己意識の形態がもつ原理」であるが、この原理に照らしてギリシア、ローマ、ゲルマンの3つの地域に歴史的な順序づけをすることは、これらがいずれもヨーロッパ文化圏に属する事情から、原理を明確にすればヘーゲルにとって比較的容易なことであったと思われる⁽⁴⁾。

これに対し、オリエントの位置づけは、おそらく単純ではなかったであろう。とりわけ、そのうち中国およびインドに対するヨーロッパの認識がその植民地化の進展によってもたらされる情報の点で格段と広がりを見せ、オリエント学そのものが確立し始めた時期⁽⁵⁾にヘーゲルは際会していた。ヘーゲルには、オリエントの歴史に関する知見を得る努力をする一方で、ここから「自己意識の形態がもつ原理」を考察する課題がぶら下がったわけである。

1817/1818年の「自然法と国家学」講義では、オリエントの圏域について、「インド的、ペルシア的、中国的、バビロニア的、メディア的な国」を列挙し、実際には、中国、ペルシア、インド、イスラム教の順に内容が展開される形の筆記録が残っている⁽⁶⁾。筆記録であるという性格上、臆断は避けなければならないが、この段階では、後の1822/1823年の「世界史の哲学」で中国、インド、ペルシア、

エジプトの順に整理されるオリエントの進行は、必ずしも確立していなかった可能性もあるであろう。

このさい、ヘーゲルには、オリエントに割り当てる「自己意識の形態がもつ原理」——『法の哲学要綱』の言い方では「実体的な精神の形態」——をあらかじめ設定してしまい、独断論的にオリエントの「歴史」なるものを構成してしまう道も拓けていたか、と問えば、おそらく我々はそのように解釈する誘惑に駆られるはずである。というのも、ギリシア、ローマ、ゲルマンの進行から予定されることとしては、オリエントがその間に差し挟まる余地はなく、それはギリシア以前に位置づけられざるをえない宿命にあったからである⁽⁷⁾。

しかしながら、このような想定で図式だけを提示して済ますに済ませない事情も実際には進行していた。オリエント学の創建により、それがなお揺籃期のものであるとしても、その情報が学問世界で一般的に流通しはじめる状態になっており、ヘーゲルは、そうした情報に応接しながらみずからの図式を正当化しなければならぬ羽目に陥っていたのである。すなわち、オリエントについてももの知らずにこれに言及することが——たとえばシュレーゲル兄弟との関係においても——学者としてとても恥ずかしい状態になっていた、ということである。

では、ヘーゲルは、オリエントに関する情報をどこから得ていたのか、という問題が浮かび上がってくるだろう。参考文献なり引用箇所なりを明示する学問手続きが踏まれているテキストであれば、この検証を行うことでその問題にそれなりに答えることができよう。ヘーゲルは、「世界史の哲学」講義において一部ではあるが学生に文献指示をしており、こは、最初に依拠しなければならない箇所である。

次に、ヘーゲル自身が参看した蓋然性の高いものとしては、ヘーゲル自身が持っていた本やベルリン大学などの所蔵本に求めることができよう。前者については、幸にも、ヘーゲルの没後に彼の蔵書が売りに出されたさいのオークション・カタログが残っている⁽⁸⁾。これは、彼の蔵書を尽くしているとは限らないかもしれないが、少なくともそこに掲載されているものは、ヘーゲルが目にした可能性がきわめて高い。

後者のベルリン大学（あるいはハイデルベルク大学）の所蔵本については、愚直に考えれば図書の受け入れ履歴を調べるということになるが、所期の目的とはかけ離れた広大な本の海に飛び込む遠大な事業になるから、これを着手点にするわけにはいかない。むしろ、ヘーゲルが生きた時代に参照可能であったとみられるオリエント関係の書籍を探索するほうが分かりやすい。もっとも、これとて、さまざまな書物を概観しながら、それぞれの位置づけを確かめ、さらにヘーゲルのテキストと突き合わせる、という作業になるから、最初から系統的に進めることが難しく、試行錯誤の過程のものとなる。とはいえ、1822/1823年の「世界史の哲学」講義については、その編集者がオリエントに関し相当詳細な註をつけて文

献指示をしているから、この先行研究を追試することを出発点にすることができる。もっとも、厳密には、それを読みえたのか、という考証も必要である。

本ノートでは、ヘーゲルの1822/1823年の「世界史の哲学」における「オリエント」史論のうち「インド」世界の知見がどこに由来するかについて、ヘーゲルの直接的な言及、ヘーゲルの所蔵本、講義録編集者の推定に分けて、整理しておきたい。

1 ヘーゲルの直接的な言及

ヘーゲルは、みずからのインド観を結ぶために利用できる資料をそれなりに評価しながら講義で言及している。

このさい、ヘーゲルのインド観にとって根本的なことは、その人倫的な状態がどのようなものであるのか、という点にある。これは、ヘーゲルにとって「世界史」が「人倫」章「国家」節の最終項として「国家の類的過程」（『法の哲学』§ 259）を表現するものであることからして、当然のことといえる。また、「世界史」は、「普遍的精神」の「展開と現実化」と位置づけられるわけだから（同§ 342）、「世界史の哲学」においても、「普遍的精神」である芸術や宗教、哲学（同§ 341）のあり方にも言及することになる。このことは、そのインド論でも例外ではない。

まず、インド世界の人倫的な状態について、ヘーゲルの見方をほぼ決定づけたといえる著作があることが、講義での言及の仕方から伺われる。ヘーゲルが生きた時代のインドに関する情報の多くは、その植民地化に乗り出していたイギリス東インド会社経由のもの、あるいはそれに随伴したものであったであろうが（もちろん、フランスによる同様のものもあるが）、そうした情報をインド研究として流通させる大きな機縁となったのは、イギリスでウィリアム・ジョーンズらの設立したアジア協会が『アジア研究(Asiatic Researches)』を系統的に刊行したことだと思われる⁹⁾。

ヘーゲルは、インド世界を扱うさい、その経験的な現実が確認できる情報を重視し、みずからがこれに依拠していることを自慢している。たとえば、ニコラウス・ミュラーが1822年に刊行した『古代インドの信仰と知と芸術』¹⁰⁾に言及して、ミュラーが古代のインドを崇拜してしまうのも、ミュラーがウィリアム・ジョーンズを知っているだけで¹¹⁾、「『アジア研究』をまったく知らない」からだ、と断じているところがある(S. 211)。ヘーゲルのほうは、本ノート第3節でみるように、講義のなかで『アジア研究』所載の論文にはっきりと言及しており、これに依拠することは、インド世界を理解するために不可欠の条件だと考えていた。もっとも、ミュラーに対するヘーゲルの物言いは、おそらく為にするもので、ミュラー自身は、論題のかぎりでこれを利用しなかった、と理解するのがおそらく穏便な見方なのであろう。

ただ、その論難のあり方はともかく、ヘーゲルが経験的な現実を踏まえてインド世界論を追究したと自負したことは、少なくともヘーゲルの主観的意図の確認として忘れてはならないことだと思われる。とくに、「インド人の人倫的諸関係を批評するのに最良の知識源泉は、人倫的な振る舞いについての政府の質問に対する裁判官の答えである」として、この「答え」が「議会に提示され」ていることに着目している(S.191)⁽¹²⁾。この点は、まったくジャーナリスティックな資料源泉が、なんらかのかたちでヘーゲルのもとに伝達していることを窺わせるものである。のちにヘーゲルがいわゆる『イギリス選挙法改正論評』で見せたようなイギリス議会への関心を考えたとき、そのさいに活用した情報の取り方は、すでにハイデルベルク大学ないしベルリン大学赴任時に確立していた、というべきかもしれない⁽¹³⁾。いや、それどころか、ヘーゲルは、1807年のイエナ陥落後、『バンベルク新聞』の編集主筆という、れっきとしたジャーナリストだったのである。

そうした経験的なインドの現実という「情報知」に接したとき、ヘーゲルは、インド人のよき人間像を想定したり（ウィリアム・ジョーンズ）(S.190)、古代インドを崇拜したり（ニコラウス・ミュラー）(S.210)といったあり方とは違う「人倫的な非道」ともいうべき「事実」に出会ったわけであり、このことは、ヘーゲルが、「自己意識の形態がもつ原理」ないし「実体的な精神の形態」の点で、インド世界をギリシア以前に位置づける格好の機縁になったであろう。

要するに、ヘーゲルは、インドの現実を直視している人々の証言を重視し、それに依拠しようとする。「20年間インド人のもとで生きたフランス人アベ・デュボアとか長く当地に勤めたイギリス人将校」とかいった「個人」は、「信頼できる」というのである(S. 191)⁽¹⁴⁾。そして、彼らこそが、インド世界の「人倫的な非道」を指摘しているわけである。もちろん、彼らが提供したインド世界像は、西欧的視点のバイアスがかかったものであるほかはないが、ヘーゲルは、それを素直に事実性として受けとめている。もともと、ヘーゲルは、そうしたバイアスに対して無頓着でありえた。もともと、「自己意識の形態がもつ原理」への関心自身が、当時の西欧において——そして西欧化した近現代世界において——成り立つものである以上は、そうした意味での西欧的観点からする「歪み」に対しては、ことの是非はともかく無反省たりえたからである。

ところで、現象の世界ではこのように「事実性」を追求するのが当然であるとしても、絶対的な精神そのものの世界ではそれが緩むのか、といえば、ヘーゲルの場合、まったくそうはならない。今度は、伝えられる資料自身の「信頼性」のほうを問題とする、つまり資料批判に進むのがヘーゲルのやり方なのである。「宗教性ということでただちに現れる厄介なことは、頼るべきはどのような叙述かということである」(S. 192)。

ヘーゲルは、「神や創造」についてインド世界が統一した考え方を持っているのか、という、ユダヤキリスト教的な表象からすればある意味で自明な答えを用

意しうる問いを立てて、インドでは、このことについてヴェーダとマヌ法典とで矛盾した説明がなされていると指摘する(S. 192)。このことは、ヘーゲルが、ヴェーダとマヌ法典の内容を少なくとも概要なりとも知りうる状態にあったことを示している。

当時ヨーロッパにおいて、ヴェーダの知識を詳細に伝えてくれたものとしては、デュペロンの翻訳『ウブネカット』⁽¹⁵⁾が有名であるが、ヘーゲルは、講義録においてこれについて直接的に言及していない。本講義のインド論では資料の出所をそれなりに明示するヘーゲルの作法からすれば、ヘーゲルが言及したにもかかわらず講義録で落ちたのか、ヘーゲルが言及しないので当然にして講義録にもないのか、という、いずれかが考えられるが、後者の蓋然性が高いのではなからうか。もちろん、この点の真相は、現在触れうるヘーゲル側の資料状況では不明とせざるをえない。ヴェーダについての知識は、デュペロンの前記翻訳のみならず、そのリクスナーによる紹介もあり⁽¹⁶⁾、また、ベルリン大学時代に若き同僚であったポップがその一部分を紹介している⁽¹⁷⁾。ポップについては、サンスクリットの言語的な根源性にかんしてヘーゲルが引き合いに出しているところがあり(S. 211)、これに関連して参照された可能性がある。もちろん、それ以外の紹介著作にも触れえたとであろうから、それに依拠している可能性もあるであろう。

マヌ法典については、そのものから引用しているようにも見え(S. 200)、当時公刊されていたそれに直接依拠している可能性も高いが⁽¹⁸⁾、二次文献を利用している可能性もあるかもしれない。

ところで、ヘーゲルがインド世界をオリエントというギリシア以前の世界として位置づけるためには、最低限、「自己意識の形態がもつ原理」が論理的にギリシアの原理より「幼い」ことが必要であろうが、この原理の確認だけではまだ十分ではない。というのも、原理的により前であることが、加えて時間的により前であることによって支えられなければ、時間の進行としての現実的な「世界史」としてまったく通用しえないからである。したがって、インドの世界として描きうるものがギリシアの世界よりも時間的により古いものとして確認される必要がある。

この通路をなすものがインドの叙事詩である。インドにおいて、詩的形態によらない「事実性」そのものズバリの史料が取れない以上は、これに依拠せざるをえないわけである。このさい、ヘーゲルは、『ナラ王物語』、『ラーマーヤナ』第2巻・第3巻、『シャクンタラー』を明示的に参照している(S. 188, 208, 220)。もっとも、このことは、翻訳であれそれ自体を読んだ、という保証までも与えないが、少なくともその紹介には接したとみななければならないだろう。

なお、歴史という時間軸の内容的な展開に不可欠なのはその空間的に地理的な関係であろうが、それに関して、とくにサンスクリットに関わる言語の類縁性とかかわりで、ヘーゲルは、カール・リッターの『ヨーロッパ世界への入口』

(1812年)⁽¹⁹⁾を「現前する歴史的な痕跡を大いに勤勉に纏め上げ、とても精神に富んで面白いものになっている」としている(S.222)。ヘーゲルは、インドに関わる地理的理解の点でリッターの所説を大いに利用している可能性がある。

2 ヘーゲルの所蔵本

ヘーゲルの所蔵本のうち、インドに関係するものと思われるものを、オークション・カタログ記載の通りまず挙げておく。冒頭の数字は、書籍の通し番号(品番)であり、原則的に、「著者名、書名、刊行地、刊行年(西暦下3桁)、製本形態」の順に並んでいる。冒頭†のマークは、寄贈本のしるし。製本形態として、brは「仮綴じ(紙表紙)本(Broschur)」、Frzbは「フランス風子牛革装本(Franzband)」、Ppbは「厚紙(板紙)装丁本(Pappband)」を示している。なお、講義録との関連で1822年以前に刊行されたものをイタリックで示す。

「I.哲学および神学」

96. *F. Eggo, Untergang d. Naturstaaten, in Briefen, üb. Niebuhrs röm. Gesch. Berlin 812. br.*

「II.ギリシア・ローマ文学、その論考、翻訳、文法その他」

566. *Arriani exped. Alex. Stereot. Lps. 818. br.*

577. *Diodori siculi Biblioth. hist. apud Gryphium. Lugd. 552. Frzb.*

610. † Fr. Bopp, Vergleich. Zergliederung des Sanscrit u. Der verwandten Sprachen. Berlin 824. br.

611. † —, Ardschuna's Reise zu Indra's Himmel nebst andern Epis. des Mahabharata. Berlin 824. br.

614. † W. v. Humboldt, über die Episode Bhagavid=Gita ans dem Mahabharata. Berl. 826. br.

620. † L. Poley, Devimahatnyam. Markandeyi Purani sectio, cum interpr. et annot. Berl. 831. Ppb.

623. *H. Voß, alte Weltkunde. Weim. 804. br.*

624. † A. E. Wolheim, de nonnullis Patmapurani capit. Diss. Berol. 831. br.

639. † Abel Rémusat, Observ. sur la Triade suprême chez la Buddhistes. Paris 831. br.

645. 46. P. v. Bohlen, das alte Indien. 2 Thle. Königsb. 830. Ppb.

647. F. Bopp, die Sündfluth, übers. aus dem Sanscrit. Berl. 829. Ppb.

668. 69. † Rélations de l'antiquité, trad. de l'Allem. de Kreuzer et complétées par Guignault. Tome I. en 2 Parties et avec 1 Vol. de planches. Paris 825. br.

683. Fr. Kreuzer, Abriß der röm. Antiquitäten. Lpz. u. Darmst. 824. br.

684–88. —, *Symbolik u. Mythologie. 4 Thle. mit einem Heft Tafeln in 4to. Lpz. u. Darmst. 819. Ppb.*

727. F. A. Rosen, *Prolusio radicum Sanscrit. Berol. 826. br.*

740. F. Schlegel, *über Sprache u. Weisheit der Indier. Heidelb. 808. br.*

741. A. W. Schlegel, *Ramayana carmen. 1r Th. 1ste Abth. Bonnæ 829. br.*

742. —, *indische Bibliothek. 2r Bd. 4tes Heft. Bonn 827, br.*

745. Fr. Schlegel, *Gesch. der alten u. neuen Literatur. 2 Thle. in 1 Bd. Wien 815. Ppb.*

788. *Sakontala, indisches Drama, übers. von G. Forster, herausg. v. Herder. 2te Aufl. Frankf. a. M. 803.*

「IV.地理、歴史、法学および国家学」

1107. [W. Robertson.], *An historical disquisition concerning the India, Basil. 792. br.*

「その他」

1563. *Annales of oriental Litterature. To be continuet Quaterly. P. I. London 810. br.*

このうち、ヘーゲルが講義を開始した1822年以前のもを抽出すると、上掲イタリックで示しているように、96. Eggo, 566. Arriani, 577. Diodori, 623. Voß, 684–88. Kreuzer, 740. 745. Fr. Schlegel, 788. Sakontala, 1107. Robertson, 1563. *Annales of oriental Litterature* といったものが講義形成にかかわったと考えられる。

このうち、96番F. Eggoを筆名とする『自然国家の没落』は、実際には、シュツール (Stuhr) の著作で、これについては、『法の哲学要綱』第355節への註解で言及がなされている⁽²⁰⁾。この著作は、主要にはローマの歴史に関するものであるが、インドについても言及がなされている。

566番のアリアノス⁽²¹⁾、577番のディオドロス⁽²²⁾については、古代におけるインドへの言及として利用されたであろうが、カースト制その他のインドの人倫的状态について指摘はあっても詳細に言及しているわけではない。したがって、身分制そのものの意義を認めるヘーゲルとしては、カースト制を軸とする身分制がいったいいかなるものであるのか、という詳細を知りたいところであり、資料的には、この点でまったく不十分であったと思われる。

684–88番のクロイツァーの『シンボルと神話』は、第2版のもので、第1版(1810年)からは大幅に増補されて、インドの項目が付け加わっている。その註は詳細を極めており、『アジア研究』への言及もなされている。クロイツァーは、ハイデルベルク以来のヘーゲルの友人であるから、この書に大きく依拠した可能性があるだろう。

740番フリードリヒ・シュレーゲルの『インドの言語と叡智について』は、ドイツのみならずヨーロッパにおいてインド学を大きく展開する機縁になった著作

で、ロマン主義にかかわっても重要な役割を果たす書物である⁽²³⁾。ヘーゲルは、おそらくシュレーゲルからもインド情報を相当得ているであろうが（たとえば文学に関し745番）、そのロマン主義に対抗するかたちでインドに対する評価も定めていかなければならなかったはずである。

3 講義録編集者の推定

ヘーゲルの「世界史の哲学」のオリエントに対する編纂者の註解は並大抵のものではなく、ヘーゲルが生きた当時のオリエント関連文献を総ざらいしている感があり、その註解のほとんどはオリエントに費やされているといっても過言ではない。ここでは、まず、推定された参照箇所も含めて著者順に整理しておく。なお、ヘーゲルが、著者名ないし書名を挙げているものについては、下線で示す。また、我々の文献確認に基づき、書誌データに関して講義録編集者の記述を訂正しているものがある。カッコ内は、参照箇所とされているものである。

(1) *Arriani nicomediensis Expeditio Alexandri*, Lipsiae 1818. (Arrian, *Alexanders des Grossen Siegeszug durch Asien*, Zürich 1950. (S. 406, 417ff.)

(2) *The Code of Gentoo Law*, hrsg. v. Nath, Brassey Halhed, London 1777. (ch. XXI, sect 7)

(3) *Institutes of Hindu Law; or the ordinances of Menu, according to the gloss of Cullúca, comprising the Indian system of duties, religious and civil: Verbally translated from the original sanscrit, [with a preface by Sir William Jones], Calcutta 1794.* (I. § 11-13, 87-93, 98-100, IV. § 45-50, 78, 80, 81, VIII. § 62-68, 103-112, 123-125, 140-142, 270-271, 279, IX. § 3, 4, 90, 114-117, 189, 317, X. § 8, 12, 51-54)

(4) *Asiatic Researches* 所載論文。

① J. Bentley, “On the Hindu Systems of Astronomy, and their connection with History in ancient and modern times”, in: vol. VIII, Calcutta 1805, p. 195-244.

② Francis Buchanan, “On the Religion and Literature of the Burmas”, in: vol. VI, London 1801, p. 163-308.

③ H. T. Colebrooke, “Enumeration of indian Classes”, in: vol. V, London 1799, p. 53-67.

④ H. T. Colebrooke, “On the Religious Ceremonies of the Hindus, and of the Bráhmens especially, Essay I”, in: vol. V, London 1799, p. 345-368.

⑤ H. T. Colebrooke, “Observations on the sects of Jains”, in: vol. IX, Calcutta, p. 287-322.

⑥ Jonathan Duncan, “Historical Remarks on the Coast of Malabar, with some

- Description of the Manners of its Inhabitants”, in: vol. V, London 1799, p. 1–36.
- ⑦ Jonathan Duncan, “An Account of two Fakeers, with their Portraits”, in: vol. V, London 1799, p. 37–52.
- ⑧ Joinville, “On the Religion and Manners of the People of Ceylon”, in: vol. VII, London 1803, p. 397–444.
- ⑨ William Jones, “On the Gods of Greece, Italy, and India”, in: vol. I, London 1788, p. 188–235.
- ⑩ Brigadier General Malcolm, “Sketch of the Sikhs”, in: vol. XI, Calcutta 1810, p. 197–292.
- ⑪ Captain Edward Moor, “Account of an hereditary living Deity, To whom Devotion is paid by the Bramins of Poona and its Neighbourhood”, in: vol. VII, London 1803, p. 381–395.
- ⑫ J. D. Paterson, “On the Origin of the Hindu Religion”, in: vol. VIII, Calcutta 1805, p. 44–87.
- ⑬ John Rawlins, “On the Manners, Religion, and Laws of the Cu’ ci’s, or Mountaineers of Tipra - Communicated in Persian”, in: vol. II, London 1799, p. 141–146.
- ⑭ John Shore, “On some extraordinary facts, customs, and practices of the Hindus”, in: vol. IV, London 1799, p. 329–348.
- ⑮ Samuel Turner, “Copy of an Account given by Mr. Turner, of his Interview with Teeshoo Lama, At the Monastery of Terpaling, enclosed in Mr. Turner’s Letter to the Honourable the Govrnor General, dated Patua, 2d March, 1784”, in: vol. I, London 1799, p. 172–176.
- ⑯ Captain Francis Wilford, “An Essay on the Sacred Isles in the West, with other Essays connected with that work”, Essay I, On the geograpfical systems of the Hindus, in: vol. VIII, Calcutta 1805, p. 245–368.
- ⑰ Captain Francis Wilford, “An Essay on the Sacred Isles in the West, with other Essays connected with that work”, Essay II. Anu-Gàngam, or the Gangetic Provinces, and more particularly of Magad’ha, Essay III, Of the Kings of Magad’ha; their chronologg, Essay IV, Vicramáditya and Saliváhaána; their respective eras, with an Account of the Bala-Rayas of Balhar Emperors. in: vol. IX, Calcutta 1807, p. 32–243.,
- (5) Franz Bopp, Über das Conjugationssystem der Sanskritsprache in Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen und germanischen Sprache, Frankfurt a. M. 1816. (S. 175, 180f., 189ff.)
- (6) Alexander Dow, *The history of Hindostan*, the second edition, in two volumes,

- London 1770. (S. XXXVIII f., XLII f., XLIV f., XLVIII f.)
- (7) Abbé Jean Antoine Dubois, *Description of the character, manners, and customs of the people of India; and of their institutions, religious and civil*, London 1817. (p. 1f., 24, 28ff., 40, 45, 91f., 137, 330, 367, 401f., 413f., 416ff., 421, 454f., 481)
- (8) Kalidas, *Sakontala oder der entscheidende Ring*, Ein Indisches Schauspiel, hrsg. v. Georg Forster, der Zweiten rechtmäßigen, I. G. V. Herder besorgten Ausgabe, Zweiter Abdruck, Heidelberg 1820.
- (9) Friedrich Kreuzer, *Symbolik und Mythologie der alten Völker besonders der Griechen*, 1. Theil, 2. Aufl., Leipzig und Darmstadt 1819. (S. 599, 608f., 614)
- (10) Colin Mackenzie, *Mackenzie collection: a descriptive catalogue of the Oriental manuscripts, and other articles illustrative of the literature, history, statistics and antiquities of the South of India*; collected by the late Lieut. Col.-Colin Mackenzie, Surveyor General of India / by H. H. Wilson, 2 vol., Calcutta 1828.
- (11) James Mill, *The history of British India*, second edition, vol. I, London 1820. (p. 142, 161f., 163, 169, 171f, 173, 206f., 209, 212, 221, 225, 235f., 239, 256, 265ff., 274, 272, 283, 285, 309, 310, 333, 352f., 355, 357f., 365, 388, 391f., 395, 399, 403, 404)
- (12) Niklas Müller, *Glauben, Wissen und Kunst der alten Hindus in ursprünglicher Gestalt und im Gewande der Symbolik, mit vergleichenden Seitenblicken auf die Symbolmythe der berühmten Völker der alten Welt, mit hierher gehöriger Literatur und Linguistik*, Bd. 1, Mainz 1822 (Faksimile, Leipzig 1968).
- (13) Carl Ritter, *Die Vorhalle europäischer Völkergeschichten vor Herodotus, um den Kaukasus und an den Gestaden des Pontus*, Berlin 1820. (S.27)
- (14) Friedrich von Schlegel, *Über die Sprache und Weisheit der Indier*, Heidelberg 1808. (S. III f.)
- (15) Samuel Turner, *An account of an embassy to the Court of the Teshoo Lama, in Tibet; containing a narrative of a journey through Bootan, and part of Tibet, London 1800 (Neuere Geschichte der See- und Landrisen. Bd. 14. Samuel Turner's, Capitains in Diensten der ostindischen Compagnie. Gesandtschaftsreise an den Hof des Teshoo Lama durch Bootan und einen Theil von Tibet, Hamburg 1801).* (p. 306, 307, 310, 314f., 321, 334, 348, 391f.)

このうち、ヘーゲルによる直接の言及があるものは、前節で見たように、(4)の *Asiatic Researches* そのものと、そのうちの著者の参照としては①の Bentley (S.215)、⑩の Wilford (S. 214, 216, 237) がある。また、(8)の Kalidas (S.220)、(12)の Niklas Müller (S.210) は、書名とともに言及があり、(1)の Arrian (S.210)、(5)の Bopp (S.220)、(7)の Dubois (S.190)、(13)の Ritter (S.221)、(15)の Turner (S. 228f.) につい

ては、人名としての言及がある。したがって、これらは、明確にヘーゲルが参照したものと位置づけてよいであろう。

ヘーゲルが明言していないものでとくに考慮すべきは、(10)のJames Millのものであろう。これは、議会での議論というヘーゲルがもっとも関心を寄せる話題を提供していると見なされているからである。

おわりに

「自己意識の形態が持つ原理」への関心はすこぶる概念論的なものだが、現実のそれへの関心はきわめて経験論的なものである。ヘーゲルが、こうした経験論の魂を持ちあわせなかったとしたら、インドの現実を確かめることなく、シュレーゲル兄弟と同様の文学論で古代インド像を結んでおしまいにすることもできたであろう。そして、このような次第であれば、おそらく、ヘーゲルとロマン主義との関係は、案外に親和的になりえたかもしれない。しかしながら、実際のところはそうならなかった。そして、この点にこそ、世界に対する関わり方の違いが、象徴的かつ先鋭的に現れているといえるのではないか。

ヘーゲルの「世界史の哲学」における「オリент」史論を、たんに概念論的な図式で構築された議論とばかり読み解くのでは、オリентに対するそうした接近態度の根本的な違いを消し去ってしまうことになると思われる。この意味では、ヘーゲル哲学の特色が「歴史性」にあるとする議論の当否のリトマス試験紙は、実はヘーゲルの「オリент」史論をどう位置づけるかをみることにあるのではないか。当然ながら、ヘーゲルのいう「オリент」をたんに概念論的にのみ理解する議論であれば、そこには時間性が無用であるから、「歴史性」はヘーゲル哲学の特色ではない、と主張しているわけである。

もっとも、ヘーゲルが確認しようとした現実と、それを古代と連続させようとする操作については、その方法それ自身に問題をなしとしない、ともいえるであろう。しかし、まったくもって現実の足場を払ってしまう議論との対比では、それはなお了解可能ななにかを残しているはずである。

（本ノートは、2008年度跡見学園女子大学特別研究助成費による研究（研究課題「ヘーゲル世界史哲学講義における中国及びインド論の資料源泉の研究」）の研究成果の一部である。なお、本稿をなすにあたって、ヘーゲルの所蔵本カタログにおける略号の読み方について本学教授高野彰氏から御教示を得た。ここに感謝の意を込めてこのことを記しておく。）

註

1 Vgl. Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*,

Bd. 12, Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte, Berlin 1822/1823, Nachschriften von Karl Gustav Julius von Griesheim, Heinrich Gustav Hotho und Friedrich Carl Helmann Victor von Kehler, hrsg. v. Karl Heinz Ilting, Karl Bremer und Hoo Nam Seelmann, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1996, S. 113ff. 以下、文中で断りなく頁数を示すときは、本書の頁数である。

- 2 Vgl. Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Werke*, Bd. 7, Grundlinien der Philosophie des Rechts oder Naturrecht und Staatswissenschaft im Grundrisse, Mit Hegels eigenhändigen Notizen und den mündlichen Zusätzen, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main 1970, § 352, S. 508.
- 3 Vgl. Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd. 1, Vorlesungen über Naturrecht und Staatswissenschaft, Heidelberg, 1817/18, Felix Meiner Verlag, Hamburg 1983, § 165, S. 258.
- 4 たとえば、ヘーゲルの蔵書のなかには、次のようなものがあった。
164. C. Meiners, Grundriß der Geschichte der Menschheit. Frankf. u. Lpz. 786. br.
949. J. B. Bossuet, Discours sur l'histoire universelle. Paris 681. Frzb.
964-75. K. Fr. Becker, Weltgesch. 4e Aufl. v. Woltmann bearb., u. die 2 letzten Thle. von Menzel. Berlin 817-25. 12 Thle. Ppb.
976-79. Ch. D. Beck, Anleit. zur allg. Welt- u. Völkergesch. 4 Bde. Bd. 1 Lpz. 813. Bd. 2-4 788-807. Ppb.
983. John. Bolingbroke, on the study and use of History. Basil. 791. br.

これらの所蔵本のデータの出所および若干の読み方については、第2節および註8参照のこと。

164番のマイナーズの書は、カタログで Philologie に分類されるもので、地球の成立からはじめて、人種、文化、食事、住居、衣服、女性の状態、娯楽、珍しい風習、統治形態、法律、戦争法規と国際法、奴隷についての法律、所有についての法律、刑法、結婚の法律と父権、習俗、儀礼、未開の諸民族の考え・技能・技術について紹介し、46頁に及ぶ詳細な文献表をつけている。この文献のなかには、オリエントに関するものが相当含まれている。ヘーゲルは、この文献表を頼りにした可能性がある。Vgl. C. Meiners, *Grundriß der Geschichte der Menschheit*, Lemgo 1785 (Google).

949番のボシユエの書は、アダムからシャルルマーニュまでの歴史を描く第1部、天地創造から始まる宗教の歴史を描く第2部、スキチア、エチオピア、エジプト、アッシリア、メディア、ペルシア、ギリシア、ローマの国々を描く第3部からなる。Cf. Jacques Benigne Bossuet, *Discours sur l'Histoire universelle*, a Monseigneur le Dauphin, pour expliquer la suite de la Religion & les changemens des Empires, Premiere Partie, Depuis le commencement du Monde jusqu'a l'Empire de Charlemagne, Paris 1681 (Google).

964番以下のベッカーの12巻本の第1巻から第3巻は古代史であり、第1巻でエジプトについて簡単に触れたあとユダヤ、ギリシア、イタリアとローマの歴史に進み（紀元前550年まで）、第2巻でキュロスからアレキサンダー大王を経て（紀元前537年から紀元前324年まで）、第3巻でローマからイエス、オドアケルなどを扱うが（紀元前323年から紀元後476年まで）、この第3巻の「キリストの誕生からローマにおける帝政の没落まで」を主題とする「第5期」冒頭において「中国人とインド人」という2頁弱からなる一節を設ける。「中国人とインド人という2つの民族は、まったく独自の進行で文化を作り上げており、キリストの生誕以前にすでにその絶頂に達していたとみられる。活発な若者の時期を過ごしていまや休んでいる老人のようにこれらが老いさらばえて衰退しているのを

我々はいま見ている。」「ヒンドスタンは、美しい天国のような国であって、紀元前100年には隆盛を極めていたとみられる。」Karl Friderich Becker, *Die Weltgeschichte, für die Jugend*, T. 3, Stuttgart 1818 (Google), S. 266f. なお、第4巻と第5巻は中世史として476年から1453年までを、第6巻から第12巻までは近代史として1453年から1816年までを扱う。

983番のベックの書は、その第1巻で、古代世界について天地創造から始め、旧約聖書の進行に準ずるかたちで文献実証をしようとしている。Vgl. Christian Daniel Beck, *Anleitung zur genauern Kenntniß der allgemeinen Welt- und Völker-Geschichte vorzüglich für Studirende*, Ester Theil, Einleitung, Urgeschichte, Alte Völkergeschichte bis zu Regierung Alexanders des Maced, Leipzig 1813 (Google). なお、この第1巻は、先に出版した次の書の第1巻中第3期までの詳論と思われる。Vgl. Christian Daniel Beck, *Anleitung zur Kenntniß der allgemeinen Welt- und Völker-Geschichte für Studirende*, Ester Theil, Bis auf die Macedonische Monarchie, Leipzig 1787 (Google); Zweyter Theil, Bis auf die Theilung der Carolingischen Monarchie, Leipzig 1788 (Google); Dritter Theil, Bis auf das große Reich der Mongolen, Leipzig 1802 (Google); Vierter Theil, Bis auf die Entdeckung von Amerika, Leipzig 1807 (Google). なお、このうち第4巻では、冒頭モンゴル（元）について触れ、さらに13世紀から16世紀までのインドの歴史について触れている。

983番のボーリングブロックの書は、歴史論である。Cf. Henry St. John (Lord Viscount Bolingbroke), *Letters on the Study and Use of History*, vol. 1, Basil 1791 (Google).

- 5 サイドは言う。「オリエントをめぐるさまざまな表象は、十八世紀の六〇―七〇年代を境にして変化した。それ以後（私が近代オリエンタリズムと呼ぶ時期）、表象の範囲が格段に広がった。事実、ウィリアム・ジョーンズ、アंकティル＝デュペロン〔フランスの東洋学者一七三二―一八〇五〕以後、ことにナポレオンのエジプト遠征以後になると、ヨーロッパははるかに科学的にオリエントを認識するに至り、また、かつてないほどの権威と規律とをもってオリエントに居住するようになったのである。」エドワード・W・サイド『オリエンタリズム』上、板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社、1993年、60頁。Edward W. Said, *Orientalism*, Vintage Books, New York 1979, p. 22.
- 6 Vgl. Hegel, *Vorlesungen, Ausgewählte Nachschriften und Manuskripte*, Bd. 1, § 166, S. 258ff.
- 7 『精神の現象学』（1807年）の「宗教」章では、ギリシアの宗教が想定される「芸術（人為）の宗教」に対し、エジプトなどが想定される「自然の宗教」が先行しており、宗教の分野での現象の論理ではあるが、ギリシアに対してオリエントが先行することがここですでに確立していたとも言える。
- 8 *Verzeichniß der von dem Professor Herrn Dr. Hegel und dem Dr. Herrn Seebeck, hinterlassenen Bücher-Sammlungen*, Berlin 1832. このオークション・カタログについては、加藤尚武氏に参看させていただいた。
- 9 次のリプリントがある。*Asiatic Researches, Comprising History and Antiquities, the Arts, Sciences, and Literature of Asia*, 24 vols, ¹1788-1835 [reprint: Cosmo Publications, New Dehli 1979-1980].
- 10 原題は、もっと長い。第3節文献（12）を見よ。
- 11 ミュラーは、本書でウィリアム・ジョーンズにたびたび言及している。
- 12 「世界史の哲学」編纂者によれば、ジェームズ・ミルの『英国のインド史』に依拠しているとされる(S.585)。Cf. James Mill, *The History of British India*, 2. edition, 6 vols., London 1820.
- 13 『イギリス選挙法改正論評』では、*Allgemeine preußische Staatszeitung* を利用している。

- Hegel, *Werke*, Bd. 11. S. 83.
- 14 Jean Antoine Abbé Dubois, *Description of the character, manners, and customs of the people of India; and of their institutions, religious and civil*, London 1817. 「イギリス人将校」については、さしあたりウィルフォード(Wilford)を想定することができる(本ノート第3節参照)。
 - 15 これは、ショーペンハウアーが感動したことで有名。前田耕作『宗祖ゾロアスター』、ちくま学芸文庫、2003年、104頁参照。『ウブネカット』については、目下参照しているものは、*Das Oupnek'hat*, Die aus den Veden Zusammengefaßte Lehre von dem Brahm, Aus der Sanskrit=persischen Uebersetzung des Fürsten Mohammed Daraschekoh in das Lateinische von Anquetil Duperron, in das Deutsche übertragen von Franz Mischel, Dresden, 1882. 本邦翻訳としては、「ウブネカット奥義」福島直四郎訳、『ウバニシャット全書』七、世界文庫刊行会、大正12年、343-408頁。これは、10篇の翻訳を取める。
 - 16 Thaddae Anselm Rixner, *Versuch einer neuen Darstellung der uralten indischen All-Eins-Lehre; oder der berühmten Sammlung Tīw Oupnek'hat, Erstes Stück, Oupnek'hat Tschehandouk genannt*, Nach dem Lateinischen, der Persischen Uebersetzung wörtlichgetreu nachgebildeten Texte des Herrn Anquetil du Perron frey ins Deutsche übersetzt, und mit erläuternden Anmerkungen versehen von Thaddae Anselm Rixner, Nürnberg 1808. [reprint der Originalausg, 2007]
 - 17 Franz Bopp, „Wiswamitra's Büßungen, Eine Episode aus dem Ramajana, Aus dem Sanskrit im Versmaaße des Originals getreu übersetzt“, in: *Über Conjugationssystem der Sanskritsprache im Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen, germanischen Sprache*, hrsg. u. mit Vorerinnerungen begleitet von Karl Joseph Windischmann, Frankfurt a m Main 1816 [reprint: Georg Olms Verlag, Hildesheim / New York 1975], S.159-235.
 - 18 マヌ法典については、本ノート第3節の文献表(2)を見よ。なお、本邦では、『マヌ法典』、中野義照訳註、日本インド学会、1951年、がある。
 - 19 リッターの本書については、本ノート第3節の文献表(12)を見よ。
 - 20 Hegel, *Werke*, Bd. 7, S. 510.
 - 21 邦訳、アッリアノス『アレクサンドロス大王東征記』上・下、大牟田章訳、岩波文庫、2001年。
 - 22 邦訳、ディオドロス『神代地誌』飯尾都人訳、竜溪書舎、1999年。
 - 23 赤松明彦『バガヴァッド・ギーター——神に人の苦悩は理解できるのか?』、岩波書店、2008年。